はじめに

本講義はあらゆるレベルの大学に合格することを目標とする講座です。

直前期の現代文の勉強で重要なのは、「今まで習ったことができるようになっているかを確認すること」です。習っていないことは本番ではできません。今まで考えたことがないものが、本番で考えられるわけもありません。

そこで、直前期では

①「読解法」

②「設問解法」

という2点を重点的に確認していくことになります。

本講義では過去問を用いて、今まで学んできた「読解法」と「設問解法」が使えるものになっているか、最終チェックを行います。ですから、「できるからやらなくても良い」とは考えないでください。「できるようになったことを再確認する」というつもりで、臨んでください。

この冬、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。
一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① 文法
② 構文
③ 論理

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。
また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。
最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対

し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「4つの言葉のルール」と「4つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の4つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も4つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点 効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ映像を見るだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ 予習について

本文を通読し、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして設問に解答してください。

冬期講習では100%を目標として解答してください。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント 問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ 講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。**ただし、本文に線を引くのは構いません。**

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント	復習ポイントを覚える。解答を書き直す。

現代文 ファイナルチェック〈読解法〉目次

第一講 傍線部内容説明問題解法……p.8
第二講 傍線部理由説明問題解法……p.28
第三講 空所補充問題解法……p.36
第四講 総合問題解法……p.46

第一講　傍線部内容説明問題解法　35分

傍線部説明問題　LEVEL 1

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

あるとき、その評議員会が終わって、昼食をしながら一同歓談ということになった。メンバーは、言語、文章、国語などの権威者ばかりである。

ひとりの声の大きな評議員が、

「ワープロを始めたのですが、使い方がわからず往生しました。もちろんマニュアルはついているのですが、これが役に立たないのです。いくら読んでも、さっぱりわからない。しまいには腹が立ってきました」

と言うと、それが口火になって、ほかの人たちが、そうだ、そうだ、と相槌をうつ。同じような思いをしていたのであろう。はじめの評議員が、

「技術者は技術にはもちろん詳しいでしょうが、文章の書き方を知らないのです。自分たちにわかっているから、一応のことを説明すればわかると思っているのでしょう。正しく、わかるように書くことを教えないといけません。ああいうマニュアルは欠陥品です」

とやる。それにつづいて、理科系の人がいかにことばを粗末にするか、文章の書けないのが多いか、などがこもごも話し合われ、ついには国語教育の不備というところに落ち着いた。

十数名の評議員のだれひとり、マニュアルがわからないのは、読む側に読む力がないからである、と言った人はいない。みんな、マニュアルを書いた技術者の悪文、不親切な表現のせいにしたのである。ことばについて一家言どころか、専門家としての見識と教養をもっているひとたちである。まさか、自分たちに読めない文章があるとは思わない。読めなければ、書いた方が悪い。文章が文章でないからだ。そう考える。

（外山滋比古『読みの整理学』）

問　傍線部「そう考える」とあるが、その具体的な内容を説明したものとして、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

① ことばの専門家たちは、マニュアルがわからないのは読む側に読む力がないからだと考えること。
② マニュアルがわかりづらいのは理科系の人の表現力が乏しく、国語教育の不備だと考えること。
③ ワープロの使用者は、熟達するまでマニュアルを何度でも読み返すことが必要だと考えること。
④ ことばの専門家たちは、自分たちに読めない文章があれば、それは書いた方が悪いと考えること。
⑤ 自分のわかっていることを人に伝えるには、読む側に立った文章を書く必要があると考えること。

傍線部説明問題　LEVEL 2

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

われわれの存在は、身体表面の様態を少し変更するだけで、たちまち大きくぶれてしまう。もちろん、われわれは毎日このような激しい揺れを自分に強いているわけではない。むしろある意味の枠のなかに、自分を適度に閉じ込め、適度に脱落させている。化粧、それは、われわれが試みる《小さな狂気》の体験である（「狂気」は、フランス語の d 駑駭 ager という言葉をまねて、「人格の引っ越し」と表現することもできる）。化粧は顔の造作をなぞり、強調する、つまり顔のゲシュタルトにアクセントをつけるのであって、顔の造作を無視したり否定したりするのではない。ナチュラル・メイクという言葉も示しているように、現代の化粧は自然を否定するのではない。自然を規範としながら、しかも自然を可能なかぎり変形する。

したがって、化粧のこつは、自然を装いながら、しかも装っているという事実を完全には隠さないところにある。自然からのぶれとしての化粧、それはいつも、自然からの逸脱へと、つまりは別の存在可能性へとわれわれを誘いこみながら、しかも帰路を断つことはないのである。

（鷲田清一『最後のモード』）

問　傍線部「しかも帰路を断つことはないのである」とあるが、それはどういうことか、その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号を解答欄に記入しなさい。

1　わたしが本来のわたしに戻ることは、いつでも可能だということ。
2　わたしと他者の関係が、絶え間なく変化しつづけていくということ。
3　わたしの身体に固有な言語が、顔の不在によって、回復するということ。
4　他者の存在への興味が、いっそう強まるということ。
5　わたしと他者の間の鏡のような関係が、なくなることはないということ。

傍線部説明問題 LEVEL 3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

若い落語家の生活を描いた「の・ようなもの」という映画を見た。「昔みたい」というアメリカ映画も上映されている。映画や小説のタイトルが、同時代の気分を反映していることがあるが、最近の世のなかには「のようなもの」「みたいなもの」が数多くあるように思われる。

今年（一九八一年）二月二十四日付の新聞朝刊に載った「笑いはどこへ行く」という討論のなかで、榎本了壱（えのもとりょういち）氏は次のように発言している。「最近ぼくたちの間でも、何々のようなものという、限定されない、しかし非常に何かに近いものっていうような表記の仕方がはやっている。つか（こうへい）さんの芝居にしても、演劇のようなものではないか。あるいは、新しい漫才といわれているのも、漫才のようなものではないかな」。本物の影が薄くなって、「のようなもの」がだんだん勢力を大きくしているらしい。

「演劇のようなもの」には、それなりの面白さがあるかもしれないが、「大学のようなもの」では、学生は勉強しないし、「教授のようなもの」が裏

口入学の仲介をし、「結婚のようなもの」をするひとがすぐに離婚する。

（宇波彰『のようなものの世界』）

問　傍線部「『演劇のようなもの』には、それなりの面白さがあるかもしれないが、」とあるが、前後の文脈をふまえると、「それなりの面白さ」とはどのようなことだと考えられるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 新しい漫才の考え方にたって演劇と全く違ったやり方をしているところ。

② 面白さなどどこにもないという点が皮肉な意味で「面白い」というところ。

③ 本物の演劇のいわばミニチュア版として、本物と全く同じ演劇の醍醐味を味わえるところ。

④ 従来の演劇の基本スタイルにあまりに忠実で、教科書的なきまじめさが感じられるところ。

⑤ 従来の演劇のあり方を踏まえてはいるが、既成の概念に縛られない自由な試みがあるところ。

傍線部説明問題　LEVEL 4

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ここで述べておきたいのは、「祭り」のなかで「仮面」をつけ、「扮装」した人びとが、そして「仮面」や「扮装」をしていない人びとも、ともに「祭り」のもつ「普遍的無礼講」という非日常的時・空間のなかで、「他者」として自己の「素顔」を表出していたということであり、それが彼らの日常と深く結びついていたということで、近代スポーツはこのような日常との結びつきを断ち切ることによって成立したということである。それは、スポーツ空間を「空地」（それは農地の一部でもあった）から「校庭」やクラブ所有の「グラウンド」へ移行させるということ、フットボールをしたいと思う「時」にいつでもできる自由な余暇時間を豊富に所有するということ、必要な費用を十分に支出できるということなどを背景になしえたことであり、さらに統一ルールをつくる、ユニフォームを揃えるということなども含む総合的で壮大な文化変革運動であった。やがてこのような条件のもとで、勝敗の争いだけを目的とする（アスレティシズム）競技会が開かれるようになり、競技会という「祭り」のもつ非日常性がそこで完成

する。それは囲い込みや食糧高騰に対してはもちろんのこと、人類滅亡の危機さえはらむ核爆弾製造競争への抗議手段ともなりえないほどの〈非日常的生活〉のものとなっているのである。

（中村敏雄『オフサイドはなぜ反則か』）

問　傍線部「『他者』として自己の『素顔』を表出していた」の説明として最も適切なものを次のイ～ニの中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　どのような「仮面」や「扮装」を選ぶかでその人の個性があらわになっていたということ。
ロ　「仮面」をつけても、なるべく自分の「素顔」に近い形で「扮装」をしていたということ。
ハ　普段とは全く異なった「他者」としての自分を演じ、祝祭的気分を味わっていたということ。
ニ　「仮面」を用いて「他者」のふりをしながら、社会への抵抗・抗議の意を表していたということ。

傍線部説明問題　LEVEL 5

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「けっこうです」という言葉は頭が痛い。高文脈言語である日本語を象徴する言葉である。文脈を理解していないと、「イエス」か「ノー」かわからないのである。日本人でも文脈が微妙で、どちらかわからないことさえある。最近の若者の間で、この「けっこうです」に代わる言葉のひとつに、「ビミョー」があろう。明確な判断を避けているとの批判もあるが、若者たちの間では、共有している文脈のなかで、最近はとくに否定的な意見や感想をできるだけ述べたくないので、推し量れという高文脈言葉として使われている。まさに微妙なのである。

（小笠原泰『なんとなく、日本人』）

問　傍線部「高文脈言語」とはどういうことか。最も適切なものを、次のア〜オの中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

ア　文脈から高レベルに孤立した言語
イ　所属する小集団が意味を決める言語
ウ　その場の状況から微妙にはずれた言語
エ　状況によって意味が逆に変化する言語
オ　その場の空気によって意味が左右されやすい言語

傍線部説明問題　LEVEL 6

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

不安であるとは、[1]自己の意識のうちに分裂がひそんでいるということである。もし私が事物存在や道具存在と同じようなありかたで存在するならば、私は自己について意識するということはありえないであろう。私が何かについて意識するということそのこと、つまり[2]「について」が私の意識の本質に属しているということそのことが、そもそも分裂のはじまりであり、したがって不安のみなもとである。不安あるいは心配は、私と私とのあいだに距離があることであり、私が私のかなたにいることである。たとえば、あした私は約束の場所であの人に会うことができるだろうかどうだろうか、ということは、現在の私と、企てられたあしたの私とのあいだの分裂であり、この分裂が不安を生むのである。したがって、不安なのは、私があの人に会えるかどうかということではなく、[3]かなたに投げ企てられた私自身に、私がふたたび出会うことができるかどうかということである。恐怖は対象的な何ものかについておこるが、[4]不安は自己のまえにおこる。

もし私が事物存在と同様に、ただ、あるところのものであり、なるようにしかならないならば、そこには、恐怖は生じるかもしれないが、不安は生じないであろう。不安は、かなたに投げ企てられた私自身と、現に投げ企てる私とのあいだの分裂から生じる。かりに私が何か著作なり事業なりを企てたとしよう。この著作、この事業は、いまだあらぬものであるが、そのためについやす私の努力と私の生活は、現にあるところのものである。企てるとは、いまだあらぬ将来へ向かって、現にあるこの自己を投げかけることである。しかし私の企てているこの著作の完成、この事業の成功は、なるがままに放っておいて必然的に到達できるような目的地ではない。かなたの私と、現にある私とのあいだをへだてているものは、私の自由である。私は自由にこの企てを放棄することもできるし、自由にこの企てを変更することもできる。[5]そこには私の自由のほかに何の支えもないということが、私の不安にほかならない。

（松浪信三郎『「哲学そのもの」でない哲学』）

問一　傍線部１「自己の意識のうちに分裂がひそんでいる」の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　自己が事物や道具ではない存在であることを意識する。
b　意識する自己と意識される事物や道具とに差異がある。
c　対象的な自己とそれを意識する自己とに差異がある。
d　意識する自己ではない事物を無意識のうちに意識する。

問二　傍線部２「『について』が私の意識の本質に属している」の説明としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　意識は何かについての意識であるかぎりつねに自己についての意識となる。
b　意識は私がその意識を意識するかぎりつねに自己についての意識となる。
c　意識はそれが私のもつ意識であるかぎりつねに何かについての意識である。
d　意識はどんな存在のありかたにおいてもつねに何かについての意識である。

問三　傍線部３「かなたに投げ企てられた私自身」の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

ａ　将来に実現することが要請されている私自身の目的。
ｂ　将来に実現が想定される私自身の存在のありかた。
ｃ　将来に実現したいと願っている私自身の自由。
ｄ　将来に実現を企てている私自身の夢や理想。

問四　傍線部４「不安は自己のまえにおこる」の説明としてもっとも適切なものを一つ選べ。

ａ　不安はつねに私自身の意識の中において生じるということ。
ｂ　不安はつねに私自身の未来の世界について生じるということ。
ｃ　不安は私が意識している対象的な存在について生じるということ。
ｄ　不安は対象としての私を意識する私の側に生じるということ。

問五　傍線部５の主張の説明としてもっとも適切なものを一つ選べ。

ａ　将来の自分と現在の自分とを区別する仕方は、すべて私の自由に任されているので不安になる。
ｂ　将来の自分についてそもそも考えるか考えないかは、私の自由に任されているので不安になる。
ｃ　将来の自分について考えていく場合に、努力の目的は私の自由に任されているので不安になる。
ｄ　将来の自分のありかたをどのように企てるかは、すべて私の自由に任されているので不安になる。

レベル1

レベル2

レベル3

レベル4

レベル5

レベル6

問1

問2

問3

問4

問5

第二講 傍線部理由説明問題解法 35分

傍線部理由説明問題 LEVEL 7

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

化学物質と人の健康との関係で、リスク評価が課題になってきたのは、発がん性物質が増えてきたからである。それまでは、有害な物質については、行政が安全基準を出し、その範囲内で化学物質を使うというルールがあった。そこで提供される安全基準が必ずしも安全を保証するものでないことは、多くの人が気付いていてはいるのだが、はっきりした事故がおきるまでは黙っているというのが普通であった。

この安全基準の基礎になっているのは、一定量の有害物が体内に入っても人間の身体には治癒能力があるから安全であるという考え方である。これは、われわれはしきい値があるとか、恕限度があると表現する。

（中西準子『環境リスク論』）

問　傍線「そこで提供される安全基準が必ずしも安全を保証するものでない」のはなぜか。その理由を二五字以内で記せ。

傍線部理由説明問題　LEVEL 8

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

　わたしたちはモデルに従って、自分の衣服、自分の身体を見る。モデルに則って衣服を取り換え、身体を変形する。モードの主導権。標準的なサイズ、規範的な形態が、わたしたちを金縛りにする。しかも、当の標準や規範は目まぐるしく変化する。そしてわたしたちは、そのつど見えない規則を遵守し、ときにはそれから逸脱するほどに、装飾をこらし、衣服で身体を拘束し、ひいては自分自身の身体をも変形しつづける。そしてそれでもなお、わたしたちは自分の衣服に、自分の身体に、（1）いつも不安を抱きつづけるしかないのだ。

　これは、ファッションに関心があるか、ないか、ということとは何の関係もない。〈わたし〉はいつもすでにファッションの視線に貫通されているのであって、〈わたし〉がファッションを外側から対象として眺めることができるというのはひとつの抽象である「ファッションには何の興味も関心もない」と宣言するひとも現に衣服を身につけているはずだし、衣服であるかぎりそこにはスタイルがある。皮肉なことに、ファッションに無

感覚なひとほどワン・パターンの「流行服」（たとえばドブネズミ色や紺色の背広姿）で身を固めているようで、様式にこだわるという語の本来の意味で、（２）彼らこそもっともファッショナブルな種族なのかもしれない。要は、問うか、問わないか、その違いがあるだけなのだ。問うに値するかどうかは、問いに直面していないひとがとやかく言うべきことではない。

（鷲田清一『モードの迷宮』）

（注）※　質料――物を形作る材料や素材のこと。

※※　デフォルメ――対象・素材の形態を意識的に変形すること。

(A)——線(1)の部分について、不安を抱きつづけるのはなぜか。本文に即して句読点とも四十字以内で記せ。

(B)——線(2)の部分について、その理由を説明した文として最も適当なものを左記各項の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　彼らはファッションの視線に貫通されているから。
2　彼らはファッションに含まれる規範性にこだわっているから。
3　彼らはその時々のファッションに左右されているから。
4　彼らはファッションのまなざしに身体を規制されているから。
5　彼らはファッションの理想を目指していないから。

傍線部理由説明問題　LEVEL 9

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

もちろん人間も生命ある動物ゆえ、今生きている現在という時間が、関心の重要な中心を占める。とりわけ子どもという存在は、家族や社会制度に保護されるなかで、「現在」だけを生きているといってもいい。歴史ということばを聞いても、自分とは関係のない遠い領域だとしか思わないだろう。なぜなら自分に関わるすべては、「未来」も含めて現在の内側にあって、回りの他人からは過ぎ去ってしまった時間のように見えるものも、子ども自身の感覚のなかでは、未分化なままつながっているからである。「現在」という時間から切り離され隔てられてはじめて、「過去」は過ぎ去ったできごととして現れる。その意味で、子どもには過去がない。

（佐藤健二『歴史と出会い、社会を見いだす』）

問　傍線部「子どもには過去がない」とあるが、なぜ「子どもには過去がない」のか。五十字以内（句読点を含む）でわかりやすく説明せよ。

レベル7

レベル8

(A)

(B)

レベル9

問

第三講　空所補充問題解法　35分

空所補充問題　LEVEL 10

次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

ニュートンが集大成したようなテクノロジー科学はたんに思想上の成果として学者たちの規範になっただけではなかった。それは政治的・社会的にも支持を獲得することができた。というより、政治的・社会的に同様のエートスがすでに生成され定着しつつあったために、支持を得ることができたのである。

このことをもっと立ち入って論じてみよう。テクノロジー科学は十七世紀に登場した近代国家の中に受容された。何かを作れたりするという意味で有用であったから受容されたのだろうか？　必ずしもそうではない。そう見るのは、狭隘な［ a ］短見である。テクノロジー科学はいわば〝イデオロギー〟として近代的政体に取りこまれたのである。

近代政治哲学の伝統はイタリアのニッコロ・マキアヴェッリによって始められたと言われる。彼の政治哲学は、政治の［ Ｉ ］をほとんど問題

にしない。それは、与えられた状況下で君主がいかにして他の有力なライヴァルたちの詐術にかかって敗北することなく、人民にほどよく信頼され、すなわち恐れられすぎもせず、かといってあなどられもせず、統治できるかの技法について論ずる。『君主論』（一五三二年）は、君主の闘争手段として、法と力をあげているが、マキアヴェッリが主として考察の対象とするのは、力による統治である。彼によれば、君主は野獣性と人間性とを巧みに使い分け、ともかく勝利しなければならない。それゆえ、力の保持が重要である。「武装せる予言者は勝利し、武力なき予言者は破滅する」（第六章）のが政治の冷徹な法則である。このような政治技法は、マキアヴェッリを待たずとも、およそ政治が存在してからというもの現実に行われていたに違いない。［イ］けれども、彼は政治悪を現実に認容し、自分の名前で、一書をもって理論化をあえてした点で嚆矢をなすのである。

　マキアヴェッリは、一言で言えば、政治におけるリアリストであった。彼の思想を英国で最初に評価した政治家の一人、ベイコンはその著『学問の進歩』（一六〇五年）の中で書いている。「われわれはマキアヴェッリやその他の、人間はどんなことをするかを書いて、どんなことをすべきかは書かなかった人々に負うところが大きい」。マキアヴェッリは実際、人間の現実について書き、理想について書かない。古来、古代ギリシャの理想

主義（観念論）的哲学を創始したソクラテスも（したがって、彼の弟子プラトンもアリストテレスも）、キリスト教の教祖になったイエスも、人間がいかに生きるべきかを説いていた。マキアヴェッリは人間がどのように現実に生きているかを凝視した。甲認識関心のレヴェルを一段下げて政治に取り組んでいるのである。［ロ］

エルンスト・カッシーラー（『国家の神話』一九四六年）やレオ・シュトラウス（「政治哲学とは何か」一九五九年）は、マキアヴェッリの政治哲学とガリレオに始まる機械論的な近代自然哲学の［Ⅱ］を認めた。近代政治哲学も近代自然哲学も、ほとんどもっぱら「いかにして」（how）の問題――操作的・技術的問題――だけにかかわるからである。［ハ］

近代自然哲学は機械論的であると言われる。機械論的自然像とは自然を機械として見る考えをいう。説明することが困難な生命的、［b］なことがらを可能な限り排除しようとするのである。抽象的言葉づかいでは、「自然は微粒子の位置運動からなる」と言いかえられる。デカルトは、宇宙が微粒子の集成で、それらを統御しているのは数学的自然法則であると見る、機械論的宇宙像の最初の提唱者となった。数学と自然学における彼の最重要概念は「分析」であった。十七世紀には最も精緻な機械は機械時計であると考えられていたので、科学革命当時、自然は時計と類比的に見られた。

しかし、十七世紀に自然総体を「死んだ」機械と等値した思想家はいなかったはずである。デカルトですら、「分析」して到達して得られた自然は機械であるに違いないと考えたが、その逆の道をたどって、「総合」して得られる自然像が機械であるとまではあえて主張しなかった。人間の肉体はまだしも、精神を機械とは見なかったのが、その証である。自然は生きているに違いないが、とりあえず機械と見て、それにアプローチしようとするのが、テクノロジー科学の［c］合意なのである。そうアプローチする方が、自然を理解しやすいからである。換言すれば、［d］に操作することが可能になるのである。その点で、テクノロジー科学はマキアヴェッリの政治哲学に実によく似ている。［ニ］

マキアヴェッリのリアリズムは、前述のようにベイコンによって高く評価され、さらにホッブズによって近代科学的よそおいをほどこされた。ホッブズは国家を［A］と見たのである。［ホ］伝統的主権者（王権）は［e］仮面をはがされ、国家をよりよく統治し、人民に安寧を提供しうるもののみが主権者に値するとされた。ホッブズにとって政治科学にアプローチする最も重要な概念は「分析」であった。彼によって、国家の成り立ちは個々人にまで分解（分析）され、こうした個々人の安全（最悪の事態としての突然の暴力死の回避）を保障してくれる政治システムはいかな

るものであるかが探究された。こういうアプローチの仕方から得られる帰結は、乙主権者は誰でもよい、したがって、政体は君主制でも共和制でもどちらでもよい、要は、人民に安定した生活を約束してくれれば、政治の最低の役割は果たされる、ということである。このリアリズムの観点に立った政治科学は、誰にでも評価されるはずであったが、現実認識があまりに冷徹すぎたために、ホッブズは彼の先駆者マキアヴェッリ同様みなから嫌われた。今日でもあまりに正直すぎる者が嫌われの的になるように――。

（佐々木力『科学論入門』）

問一　次の文は本文中に入るべきものである。イ～ホからもっとも適当な箇所を選び、解答欄に記入せよ。

彼にとっては政治とは人民の統治の技術なのである。「いかにして」の技術なのである。

問二　文中のa～eに入るもっとも適当な語句を、次の中から選び、解答欄に記入せよ（同じ語句を二度用いてはならない）。

イ　政治的　　ロ　技術的　　ハ　実用主義的　　ニ　方法論的

ホ　神秘的　　ヘ　抽象的　　ト　有機的　　チ　近代科学的

問三　文中の Ⅰ Ⅱ に入るもっとも適当な語句を、それぞれ次の中から選び、解答欄に記入せよ。

Ⅰ　イ　手段や方法　ロ　理想や現実　ハ　目的や理想
　　ニ　方法や目的　ホ　手段や現実

Ⅱ　イ　整合性　ロ　対照性　ハ　現実性
　　ニ　合理性　ホ　類似性

問四　文中の A に入るもっとも適当な漢字二字の語句を本文中より抜き出して記せ。

問五　傍線部甲のような取り組み方をした結果、君主のあり方に何を見出すこととなったか。本文中のもっとも適当な五字以内の語句を抜き出して記せ。

問六　傍線部乙のような考え方が生まれた理由について、筆者が指摘しているもっとも適当な一文を抜き出し、最初と最後の五文字を記せ（句読点も一字に数える）。

問七　筆者の主張とあうものが、イ〜ホの中に一つだけある。それを選び、解答欄に記入せよ。

イ　近代自然哲学は機械論的であるといわれるが、それはマキアヴェッリの近代政治哲学ほどには冷徹な現実と対決せず、人間を機械と見ているからである。

ロ　近代政治哲学は、技術的問題のみにかかわるものであり、近代自然哲学の機械論的な自然のとらえ方の影響下にあって、余り正直すぎる故に嫌われている。

ハ　近代自然哲学は、近代政治哲学が現実的に政治をとらえて分析するあり方の影響を受けて成り立ち、自然を冷徹に機械視し分析することをよしとする。

ニ　近代政治哲学は、近代自然哲学と対象認識の方法論の上でよく似ているが、その理想を喪失した現実重視のあり方は、共通した時代精神を反映している。

ホ　近代自然哲学は、たんに思想上の成果であるばかりではなく、現実にかかわる政治の上でも成果を生み、マキアヴェッリやホッブズの政治哲学を生む契機となっている。

問一

問二
a
b
c
d
e

問三
Ⅰ
Ⅱ

問四

問五

問六
〜

問七

第四講 総合問題解法 35分

総合問題 LEVEL 11

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ヨーロッパにおいて（また中国においても）「都市」の外延あるいは「都市と農村」の境界をなしたのは、他ならぬこの「城壁」だった。

こうした点に関し、都市計画学者の日端康雄は『都市計画の世界史』の中で次のような興味深い議論を行っている。

「城壁の存在は、同時に、都市の境界を明確にし、都市と農村、田園地帯との土地利用を区分した。逆に見れば、都市とは、その物理的条件として、コンパクトで、自然や農地とはっきり異なる、区分けされた存在として認識されたといえる。

これらの事実と長年の経験、伝統は、近代に入っての新たな都市化の時代に都市の成長をどのように受け止めるかに重要な影響をもたらした。無秩序な市街地の拡張を押しとどめ、都市地域をコンパクトにするというこ

とが早くから当然のこととして政策に取り入れられた。ヨーロッパ各国のこうした経験は、……（中略）……農村や自然地域を都市化から守るという強い力になった。」

これに対し、「わが国の都市は、地球上で例外的に都市の城壁の存在が一般的でなかった。その結果、近代に入ると、急速な都市化の圧力の前に城壁を跡地として都市計画に役立てるという機会には恵まれなかった。また自然地域や農村の侵食には無防備であった。結果的に、先進国の中では、日本の都市だけが広大なスプロール地域の形成を見ることになってしまったのである」と日端は述べる。

この記述は、[a]東南アジアにおける都市化や急激な人口集中などを考えると、一概に日本だけを特化して論じられるかという疑問も残る。つまり日本の都市の問題を考える場合には、ヨーロッパとの風土的特性の違いはもちろん、急激な後発型の産業化や大都市人口集中という、経済発展のパターンに関する要因も視野に入れる必要があるだろう。しかしそうした点をおいてなお、[1]以上の指摘は日本における「都市」というテーマを考える際の本質的な視点を提供しているように思われる。

以上のような「城壁」を含めた「都市」の外延に関する議論を踏まえて、

日端は以下のような示唆的な指摘を行っている。

「また、古代から城壁による物理的囲みは、人々に『一体感』を生んだ。防衛上の運命共同体という環境は人々に『共同体感情』を生み、『コミュニティ』を醸成したのである。……（中略）……『都市コミュニティ』は前近代の城壁の都市の時代を引きずりながら、近代都市計画の基本的テーマの一つになったのである。」（日端前掲書）

こうした「都市コミュニティ」の意味について、さらに考えてみよう。都市の〝外延〟を画する城壁に象徴されるように、ヨーロッパ（や中国）などにおける都市では、都市とその外部（農村）との境界がきわめて明瞭であり、言い換えれば、日本と違って、都市というものがひとつの実質的な「まとまり」をもっているという感じが強いということを述べた。［b］、実は「市民」という概念もこの点と不可分のものなのである。

私たちは、「市民citizen」という言葉を言葉としては知っているし、それはメディアなどでもある程度普通に使われる用語になっているが、しかしなおこの言葉は、その実質的な内実を伴って日本社会に定着しているとはいえないように思われる。かくいう私自身も、この「citizen」という言

葉の実質的な意味が、自分の中で納得のいく形で把握できているとは思っていなかった。

しかしながら、以上のような「城壁」、そしてそこでの「都市―農村」の区別や〝「都市」の外延〟の空間的な明確性、ひいてはそこから生まれる〝まとまった実体としての「都市」〟、さらにそこでの「（都市）コミュニティ」という関係性のあり方ということを考えたときに、私の中で「市民citizen」という言葉あるいは概念が、非常に〝腑に落ちる〟形で明確な意味の内実をもって立ち現れることになった。後であらためて吟味するが、市民とはその意味ではある種の「資格」であり――それは一定の（言語化された）権利・義務を伴う――、メンバーシップと呼べるものである。そして「都市」が（城壁を通じて）その外延や外部をもつように、「市民」も本来的にその〝外部〟――「市民でない者」の存在――をもっている。

ここで、そうした「市民」との関係も含めて「都市」という概念の意味について議論しておこう。

*ウェーバーは、その都市論において、すべての都市に共通しているのは「一つのまとまった定住―一つの『集落』」とりわけ一定以上の規模の「大集落」であり、かつそこで「財貨の交換」が行われること、［ｃ］「市場の存在」であるとする。しかし以上だけでは都市の一面を見たに過ぎず、

その政治的・行政的側面までを視野に入れると、「都市」というものは次のような存在として把握されなければならないと述べる。すなわち、

「都市は何らかの範囲の自律権をもった団体、特別の政治的・行政的制度を備えた『ゲマインデ』（引用者注：共同体とほぼ同義）として考察されなければならない」

ということであり、この理解を踏まえた上で、ウェーバーはさらに次のように言う。

「アジアの諸都市には、自律的な行政や、とりわけ――これが最も重要な点であるが――都市の団体的性格と、農村民と区別された都市民という概念とが、知られていなかったか、あるいは萌芽的に知られていたにすぎない。」

「中国においても印度においても、ギルドその他の職業団体は、明確な諸権限をもっていたし、あるいは少なくとも官吏たちは事実上これらの団体と諒解をつけざるをえない事情にあった。……（中略）……これに反して、通常は、都市市民のゲマインデそれ自体を代表しうるごとき・何らか

の共同の団体［例えば特に都市参事会］は、存在していない。なかんずく、都市の市民の特殊身分制的な資格が欠如している。このような身分制的資格は、中国や日本や印度には全く存在しておらず、近東アジアにおいてのみその萌芽が見られるにすぎない。」

要するに、都市の本質は、

①　それがひとつのまとまった「X」としての性格をもつこと、

そして

②　[2]「市民」という〝身分的資格〟の概念が存在すること

にあり、こうした内容を伴った都市なるものはアジア等においては存在しなかったという議論であり、これらがウェーバーのいう「都市ゲマインデ」、あるいは本書の議論の文脈に引き寄せれば「都市型コミュニティ」の実質をなす、という把握である。

ウェーバーの都市論は一九二〇年代に初形が公表されたものであり、その事実関係の把握においても、またある種の〝ヨーロッパ中心主義的な〟理解の枠組みや*バイアスという点においても、様々な面で距離を置いて見るべきものであるが、しかしその点をおいてもなお、私たちが「都市」と

いうものを考えるにあたっての基礎的かつ重要な視点を提供していると思われる。

ちなみに、先ほど言及した「城壁」についてもウェーバーは言及しており、「日本においては、それは原則として存在しなかった」、「逆に、中国では、すべての都市が巨大な城壁で囲まれていた」とした上で、「通常は、東洋の都市にも古典古代＝地中海的都市にも、また普通の中世的都市概念にも、城砦か城壁かが含まれていたのである」という興味深い指摘を行っている。

ところで、以上のウェーバーの議論に出てくる、都市のもつ「［X］」としての性格という点は、若干ぴんとこない面があるかもしれない。この点に関して、やや個人的な事柄に言及させていただくと、私は数年前から横浜市の経営諮問委員会の委員という職を務めているのだが、そこでも時々使われる「都市経営」といった言葉が、自分の中で十分にその意味をつかめていない感じをもっていた。

［d］、あるきっかけで、経済学者の岩井克人がその著書の中で述べている次のような議論を思い出し、その関連で「都市経営」そして「団体としての都市」という言葉の意味が実質を伴って理解できるようになったのである。

すなわち、岩井は「法人」という概念の歴史的起源を考察する中で、法人という概念が最初に制度化されたのはローマ時代であり、しかも法人という概念を最初に採用したのは、資本主義とは直接関係がない「自治都市」や植民地だったという。そうした点を踏まえた上で、岩井は次のように述べる。

「都市自治体とは、英語でいうと municipal　corporation あるいは city corporation です。ということは、それは、ほんとうは、自治会社あるいは都市会社と訳すべきものであったのです。いや、言葉の上だけではなく、実際の仕組みとしても、自治都市は現在の株式会社とよく似ています。市民は株主に対応していますし、市の行政機構は会社の経営組織に対応していますし、市長さんは会社の代表取締役の役割をはたしていました。」

若干話題を広げることになるが、岩井はこうした把握を踏まえた上で、今後の展望として「二一世紀とは、ＮＰＯの活動、とくにＮＰＯ法人の活動がますます活発になっていく世紀である」とし、その根拠として、それはある種の「［Y］返り」に他ならず、なぜなら「法人の起源は、ローマ時代や中世における都市や僧院や大学といった、まさに現代の言葉でいえ

ばNPOであったのです」という印象深い議論を展開している。

話を「都市」に戻すと、以上のように考えれば「(都市)自治体」といった言葉が、私たちが通常使うのとはかなり異なる、意味の強さをもって立ち上がることになる。

そうすると、岩井が述べるように市民は〝株主〟に対応するともいえるが、見方を変えれば、市民は、その人が住んでいる「○○市」という団体(コーポレーション→法人、会社)の〝社員〟ともいえるかもしれない。そこから［e］議論をふくらませれば、本書の中で論じてきたように、戦後の日本社会において人々は「カイシャ」と「家族」というコミュニティ(ムラ社会)への帰属意識を強くもちつつ高度成長期を生きてきたわけだが、「地域」というコミュニティの存在が重要になっていくこれからの時代においては、やや妙な表現かもしれないが、いわば住んでいる市や街あるいは地域を一種の「カイシャ」(=コーポレーションとしての都市)と見立てて、そこへの帰属意識や〝愛着〟をこれまでよりも強くもつと同時に、それがよりよい姿になっていくように積極的に参加していく、というイメージを考えることもできるだろう。そして若干の希望的観測をこめて言うならば、案外そうした方向が、かつてウェーバーが論じた「団体としての都市」そして「市民」意識ということを、[3]現代的な形で実現するこ

とにもつながるかもしれない。

（広井良典『コミュニティを問いなおす　つながり・都市・日本社会の未来』による）

（注）

スプロール地域……宅地が無秩序・無計画に広がった地域。

ウェーバー……マックス・ウェーバー。ドイツの社会学者・経済学者。

バイアス……偏り。

問1　空欄a～eに入る最も適切な語を次の中からそれぞれ一つずつ選んで、番号を解答欄に記入せよ。ただし、同じものを繰り返し用いてはいけない。

①　そして　②　さらに　③　つまり　④　ところが　⑤　たとえば

問2　空欄Xに入る最も適切な語を一つ選んで、番号を解答欄に記入せよ。

①　共同　②　市場　③　団体　④　制度　⑤　集落

問3　空欄Yに入る二字の熟語を記せ。

問４　右の文章には、次の一文がある段落の末尾から脱落している。どこに入るのが最も適切か。入るべき箇所の直前の五字を記せ。（句読点も字数に含む）

【脱落文】つまり「自治体」というと、現在の日本語ではどちらかというと（市役所などの）「行政」（組織）を指すものとして使われることが多いが、それは本来そうではなく、そこに住む市民全体を含んだ「団体」なのである。

問５　傍線１「以上の指摘は日本における「都市」というテーマを考える際の本質的な視点を提供しているように思われる。」とあるが、日本における都市の拡張についてのどのような指摘が本質的であると筆者は考えているか。本文中の言葉を用いて五〇字以内で述べよ。（句読点も字数に含む）

問６　傍線２「「市民」という〝身分的資格〟の概念」とあるが、それを最も具体的に言い換えた部分を含む一文を本文中から探し、その最初と最後の三字ずつを記せ。（句読点も字数に含む）

問７　傍線３「現代的な形で実現する」とあるが、それを最も具体的に述べた部分を含む一文を本文中から探し、その最初と最後の三字ずつを記せ。（句読点も字数に含む）

問8　本文の内容と最も合致するものを次の中から一つ選んで、番号を解答欄に記入せよ。

①「カイシャ」と「家族」に対して愛着と帰属意識を強くもった時代とは異なり、これからの日本社会を生きる私たちにとって重要なことは、「地域」というコミュニティのなかにどのようにそれを見出していくかということである。

② 市民はその外部に「市民でないもの」の存在を必然的に抱えるが、「市民でないもの」たちは自律した団体としての都市「市民」とは異なった人々、すなわち権利と義務の意識を欠いた社会性の乏しい人々である。

③ 経営諮問委員会の委員を務めた当初、「都市経営」や「団体としての都市」という言葉の実質的な意味がうまくつかめなかったが、岩井克人の議論を参考にすることで、それが民間人によって経営される組織体であることを了解した。

④「市民 citizen」や「団体としての都市」という概念を、たんに表面的にではなく、明確に理解するのはけっして容易なことではないが、先人たちの研究成果に謙虚に耳を傾けることによりそれは可能になることがある。

⑤ 高度成長期を生きる人々の強い帰属意識と愛着の対象であった「カイシャ」と「家族」というコミュニティは、市民自らが形成と発展に直接的に参加する「地域」コミュニティと比べると、閉じられた共同社会であった。

問1

a

b

c

d

e

問2

問3

問4

問5

問6

〜

問7

〜

問8

模範解答

第一講　模範解答

レベル1

④

レベル2

1

レベル3

⑤

レベル4

ハ

レベル5

オ

レベル6

問1	問2	問3	問4	問5
c	c	b	d	d

第二講　模範解答

レベル7

行政は治癒を前提に一定量の有害物を認めるから。

レベル8

（A）

人々が従う衣服や身体のモデルの、標準的なサイズや規範的な形態が変化し続けるから。

（B）

2

レベル9

問

過去は現在と切り離されなければならないが、子供は全ての時間が現在と未分化なままつながっているから。

第三講　模範解答

レベル10

問一　ニ

問二　a ハ　b ト　c ニ　d ロ　e ホ

問三　Ⅰ ハ　Ⅱ ホ

問四　機械

問五　力の保持

問六　彼によって～究された。

問七　ニ

第四講　模範解答

レベル11

問1

a ⑤
b ①
c ③
d ④
e ②

問2 ③

問3 先祖

問4 となる。

問5 日本の都市には城壁がなかったため、「団体」としての性格や「市民」意識が育たなかったという指摘。

問6 後である～ある。

問7 そこか～ろう。

問8

①

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。